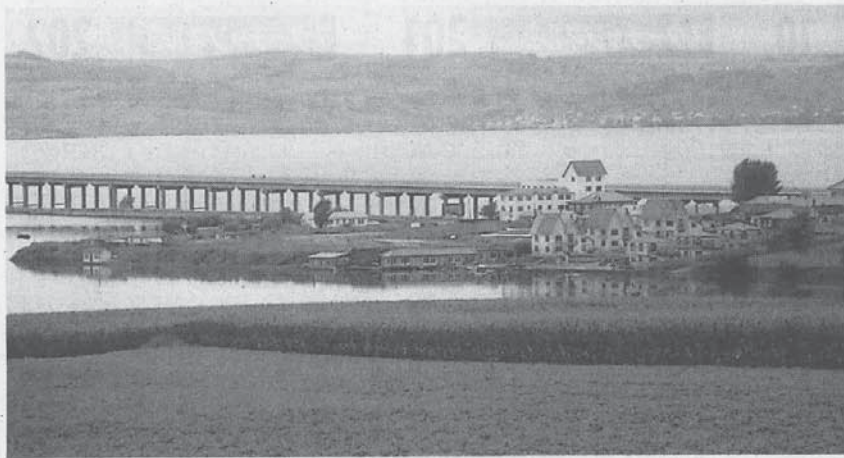


# 幸福の赤いサクランボ



中国の旅3日目の9月3日朝、吉林省白河から黒龍江省寧安市鏡泊湖に向け、バスで出発した。途中で牡丹江行きのバスに乗り継ぎ、高速道路を走ると、鏡泊湖をまたぐ大橋にさしかかり、対岸にある「鏡泊郷」が見えてきた。

鏡泊郷は1933年、満州(現在の中国東北部)に「五族協和」「王道樂土建設」の夢を抱いた日本人が、桃源郷のような景観の中に、満州国第1号の実習学校「鏡泊学園」を建て、ゆくゆくは総合大学を作ろうと計画した所だ。



## 「学園」の名残る湖畔の地

「鏡泊学園」が存在したのは建学から3〜4年に過ぎず、今は跡

形もない。しかし、中国では80年経った今でも「学園」という地名で呼ばれている、私にとって不思議なロマンに満ちた場所だ。そしてそこは、私の農園の社員で入社8年目になる黄哲華君(36)の故郷でもある。

午後2時半に鏡泊郷インターに着き、満員のバスから私と通訳の谷祖玲さんの2人だけが降りた。「学園」という名のバス停には、

黄哲華君の兄で、国営電力会社技術職員の黄澤彬さん(40)が大型SUVで迎えに来てくれた。

鏡泊郷の中心部である鏡泊村は、なだらかな丘陵の南面中腹から湖水に接する所まで下る道路沿

鏡泊村から鏡泊湖に架かる高速道路大橋を遠望する(9月3日)

多田耕太郎 1954年山辺町生まれ。金山町のスリッパ工場長を経て、41歳で就農。2009年に法人化し、2・1畝のサクランボ園を経営する。

いにまとまった約8000戸の集落。中学校や共産党地区委員会の施設などがあり、湖水の観光客や郷内の人々向けの食堂、商店、宿泊施設などが数軒ずつある穏やかな雰囲気のところだ。

7年前の夏、私が初めて鏡泊郷を訪れた時に同行していた母(当時79歳)が「ここでサクランボやリンゴを作って暮らせばどんなにいいだろうな」と湖面を眺めながらつぶやいたのを思い出した。80年以上前、学術村を作り上げようとした先人たちも、この穏やかで実りの多そうな風土に魅せられたのではないかと改めて思った。